

第二言語話者を含む会話における音声・文字メディア併用の効果

Investigation of Conversation in Second Language

with Text Input

学籍番号：201521647

氏名：于 睿政

Ruizheng YU

近年、世界中でグローバル化が進歩しており、異なる国の間でのコミュニケーションが活発となっている。異文化の人々の間でコミュニケーションを行う機会がさらに増えると考えられる。しかし、母語ではない言語を話す第二言語話者(NNS)にとって、母語話者(NS)と音声会話を行う時、会話理解の支障が生じ、文化と言語の差による誤解や効率的ではないコミュニケーションが多いと考えられる。また、NSとNNSの会話で、意思疎通が困難な場合も多いし、NSとNNSの間に流暢さの隔たりによる悪影響がよく見られている。

これらの問題を解決するために、NSが会話しながらその内容のメモをテキスト入力し、そのテキストをリアルタイムでNNSと共有する、音声と文字メディアを併用する会話手法が提案されている。これまでに、初対面のNS16名とNNS16名をペアとし、提案手法による遠隔会話をおこなうテキスト入力条件とテキスト入力のない会話のみの対照条件の両方に参加する、提案手法の評価実験が実施された。この実験の初期評価では、提案された手法について、会話中に共通基盤を示す語句が増えることや、会話後に確認した内容一致の増加が確認され、第二言語による会話における有効性が示唆されている。

しかし、この提案手法が会話にもたらす効果はまだ十分に知られていないため、本研究では、どのようにこの音声文字併用会話が行なわれているのかについて、上記実験のデータを用いて、さらに詳細な分析をおこなった。

その結果、本手法による会話では、NSの発話時間と発話長が長くなることがわかった。発話頻度については条件によらずNSの方がNNSより多かった。テキスト入力はNSのターン中の方がNNSのターン中より多くなされ、また、NSの発話内容の方がテキスト入力率が高かった。提案手法はNSの小さな負担により、NNSとの情報共有が進む優れた点があることが先行研究から知られているものの、本研究の分析から、情報発信についてNSが多いという点は、むしろ強化される方向にあることが示唆された。

研究指導教員：井上 智雄

副研究指導教員：関 洋平